

## 特別寄稿

## 「大学におけるキャリア支援」に関する報告

亀井 忠祥

## 1 はじめに

キャリア教育の趣旨は子供のうちから将来の仕事や働くということについて、主体的に考えさせることである。社会人として生きていくのに必要とされる明確な職業観を持たせることが目的で、従来の進路指導の対象が進学又は就職のみに偏っていたのに比べ、より奥深い概念をさす。

中教審は1999年にキャリア教育の必要性を訴える初めての「接続答申」を出し、その中に「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と言う文面で示されているが、奥深い範疇にあるキャリア教育をどのように考えるべきかを明らかにしたい。

昨今、大学生の学力水準の低下も指摘されている<sup>1)</sup>。しかし大学を出たばかりの若者が自立した職業観を身につけられるようしっかりとしたキャリア教育をおこなうことが重要である。

大学におけるインターンシップや社会人を招聘したキャリア形成関連の講義を進めるだけでなく、一般教養や専門科目とも連携してキャリア教育を浸透させることが重要であると考ええる。

## 2 キャリア教育とは

キャリア支援の意味は、いかなるものか。本学でもその必要性と重要性が叫ばれ強調されている。しかし正面から「キャリアとは」と聞かれたら

答えにくいものである。

従来、キャリアは、中央省庁ではキャリア組即ち公務員採用1種試験に合格した者で、将来の幹部候補生のことや出世を約束されている人をさしていたが、ここで言うキャリアとはそういう意味ではない。

キャリアとは人生、生き方あるいは渡世であると言う人もいる<sup>2)</sup>。人生そのもので、働くことで人生をどう生きていくことかと言うことである。仕事や職業の他さまざまな勉強や学習、趣味やレジャー、ボランティアなどの社会活動、家庭や家族とのかかわりまで含まれる。

このような視点から、キャリア教育において3つの視点が大切であると考える。

1つは現状認識と目標の設定を指導すること。現在の状況を認識（自己の再評価<sup>3)</sup>）し、そこから将来を予測し、重視する項目をしっかりと決めて目標設定をできるように指導する。

2つ目は時代の流れをしっかりと読み解く力の養成。同じ事象に対する記事であっても、各種メディアによってさまざまな論評がある。そのような状況の中から真実を判断し、適切に時代の流れを読むことが大切である。

3つ目は「さまざまな視点から物事を考える。」力をつける。具体的には「過去・現在・未来」あるいは「本学では、世間では、日本では、世界では」の網をかぶせて考えることである。

### 3 大学生のキャリア意識

追手門大学のキャリアデザイン論受講生のアンケート調査<sup>4)</sup>によれば、肯定項目で多かったのは、「私は生きがいのある生活を送りたいと思う。」「私は自分が本当に満足できる仕事に就きたいと思う。」「私は自分の人生をもっとすばらしいものにしたいと思う。」「私は自分の得意なことをもっと伸ばしたいと思う。」である。

また、否定項目（出来てない物）では、「私は自分が本当にやってみたい仕事は何なのか、良くわかっている。」「私は自分に合った生き方を見つけている。」「私は自分の将来の仕事や職業を決めることに、不安を感じていない。」「私は将来つきたいと思っている仕事の内容をよく理解している。」「私は将来の計画をしっかりと立てている。」「私は希望する職業に就くために、特別な勉強や準備をしている。」

自己の価値が見えず、自分がわからない。自分に自信が持てない。自分に価値が感じられない。周りに影響されやすい。ところが、期待されたよい子を演じる。充実した人生を送りたい。

学生に聞くと、将来何になりたいかわからない。夢や希望がない。尊敬する人が見当たらない。生きる目標や理想がわからない。人間関係について、「合う」人としか関わらない。人と適切な距離がとれない。友人が作れない。引きこもりがちになる。キレル。

このように現在の若者は、高すぎるプライド、能力・資質の過信、理想化されすぎた目標、現実離れした期待、全面的理解の希求など自己愛的傾向（ナルチシズム的）がある。

自己の価値が認められず、人間関係で悩み、そして将来展望が見えない状況のものが多い。従って自己を正確に理解して情報に基づく将来設計、意思決定が困難な状況にある。

この学生に向かって「自分の進路は自分で決めよ。」「良く考えて自分に合った仕事を見つけよ。」「自分が好きなことなら一生続けられるものである。」「自分の将来に夢を持って、希望を持って。」等の言葉は彼らを本当にサポートする言葉になっているだろうかと疑問を感じる。

#### 4 保護者対応について

「ご子弟のことで、今ご心配なことがありますか。」の質問に対して圧倒

的に多いのは「将来の進路に関すること」であった<sup>4)</sup>。

- ・ どのような就職先があるのか、求人はどのくらいあるのかわからない。
- ・ クラブ活動をしていないし、親しい友達もいないようです。就職のことが心配です。
- ・ クラブに関することに時間をとられて、企業説明会等に思うように行くことができていない様子である。本人に任せるしかないと思っておりますが。
- ・ 就職する気持ちはあり、就職活動も始めているようですが、職に就けるかどうか心配です。やりたい仕事はあるようですが、おっとりで、おとなしい子なので就職が心配です。

## 5 どんな企業を選択するか

現代の企業は時代の変化を敏感に感じて、優秀な学生をいかに捕まえるかに必死になっている。

大企業ではないが、社長が有能な会社は、他社がやらないことをやる努力をする。当面は儲からないが、時代が変わり、価値観が変われば見直される。また、いつか大企業の労働条件を追い越したいと思って努力している。年功序列から能力、成果、実力主義となりつつある。この中において企業の評価はどれだけ人を育てたかの人間尊重が大切である。

「地位と仕事が人間を鍛える。」と言われる。熟年となり企業において成功している人と会えば学生時代あんなに利己的で嫌な人間だったのに、人違いする程に円満で人間ができている人がいるものである。

昔、近江商人は天秤棒を担いで全国を行商して歩いた。そしてそれぞれの所で情報を得て、それを処理して、その情報資料をもって次の行商・商いに出発したわけである。そして人を作り（立派な人に成長させ）社会に貢献し続けたものである。その商売の考え方の根本は「売り手よし、買い

手良し、世間良し」の「三方良し」の精神である。売り手は勿論利益を得たし、買い手は十分価値のあるものを手に入れることができ満足、世間としてはそのことにより経済は発展し人々が幸福な生活を送ることができる。

大阪船場における商人の間で自慢は、売上高ではなく、その店を開店して創業〇〇年である。この業界でどれだけ長く生き残っているかである。長く生き残っているということは、代々「信用」があったということである<sup>5)</sup>。

経営理念は収益第一主義で人間教育及び社会的責任・使命はそのための手段だという企業がある。一方、人間教育及び社会的責任・使命がその経営の目的で、収益は後からついてくるような企業もある。キャリアセンターとしてはこれらを的確に判断し、学生へ正確な情報を提供していきたい。

## 6 キャリア支援

ところでキャリア支援は就職支援とどう違うのか。明確な違いがある。

就職支援は大学を卒業して就職する場合、次の1歩を支援するもの。

キャリア支援は人生そのもの、人生をどう生きていくかを教えるものであり、就職支援に比し奥が深いと解釈できる。働くということでキャリア支援に必要な態度とは、どんな状況にも変わらないもの、どんな時代にも変わらない人生の「ものさし」を教えてやることではないかと考える。

関西の某有名企業の入社式で取締役社長の訓示があった。「諸君はわが社で仕事をする場合、何度か壁に当たるだろう。おそらくその壁は諸君らでは乗り越えられない。その場合壁の前でウロウロしておくように！」で終わり、その解決策を示すことはなかった。

その意図は、「ウロウロしていたら壁の上は駄目でも下のほうに穴が開いていて、そこをくぐれば向こう側が見えるかもしれない。壁の前にいたら社会の状況が変わり、壁のほうから崩壊してくれるかもしれない。これ

もウロウロしていたからわかる。壁の前にいたら先輩が引っ張って向こう側まで連れて行ってくれるかもしれない。」ということであろう。

キャリア支援もこの事例と同様、学生が実際に壁に当たり、試行錯誤の中進んでいく力を養成することにあるのではないかと考える。

## 7 モチベーションの支援

ユーモアと言う意味は、辞書で引けば「不要な緊迫を除く、婉曲表現によるおかしみ」と言うことである。ユーモアがあって、人生を生きていく上で大切な言葉である。

お笑いスターの志村ケンのギャグに節をつけて「大丈夫だ！」と言うのがあるが、「大丈夫」には使い方によって2つの意味に取れる。風邪気味で仕事に行ったら「顔色が悪いけど 大丈夫?」「しんどくない 大丈夫?」「無理しないで 大丈夫?」と会う人ごとに言われていたら、たいしたこととはなくても本当に体調が悪くなるものである。

しかし「大丈夫！」はどうだろう。仕事に悩み、進路に迷い、している人に「大丈夫!大丈夫!私もそんな時代があった。何とかなるよ。大丈夫!」といわれればどうだろう。迷っている本人まで何とかなるような気がしてくるものである。

ある会社で社長が若手の有望新人に会社の重要な担当を命じた。本人も選ばれたと思いき受けけることにした。しかし、その担当業務は若手の新人がおいそれとできるしろものではなかった。取引会社からは苦情が入るし、部下からは無能とレッテルを貼られる。そして仕事がにっちもさっちもいなくなる。この状況が数ヶ月続き本人は完全に自信を失って沈んでいると、ある先輩が寄ってきて「大丈夫!大丈夫!私もそうだった。」と言ってくれた。その一言で、その新人はわれに返って肩の荷がおりた。そして仕事の方も社長が見込んだだけの人物であり、肩の荷がおりたことにより

仕事全般が見えるようになり、悩みが吹っ切れて失敗も少なくなり、その仕事を立派にこなすようになってきた。

一見、組織的ではなく、また、論理的ではない言葉かけ1つであっても、社員への大きな支援となっている。学生に対しても同様にこのような「モチベーションの支援」は必要ではないかと考える。

## 8 結 言

大学教育あるいは研究というものは高校までの教育と違って、究極的にはわからないことを教えるものである。わからないことをわかりやすく説明するのが教職員の仕事である。同様にキャリア支援について、なかなか社会は定形化・理論化されにくいものである。わからないこと、つまり、将来のことについては不確定要素が多い。このような中で、理論的に考えて良いこととそうでないことを明確に区分し、学生に説明していくことが今後の課題である。

### 参考文献

- 1) 西村和雄他編 (1999)、分数のできない大学生、東洋経済新報社
- 西村和雄他編 (2000)、小数のできない大学生、東洋経済新報社
- 西村和雄他編 (2001)、算数のできない大学生、東洋経済新報社
- 2) 玄田有史 (2008)、大学のキャリア教育に求められるもの、追手門大学キャリア教育シンポジウム講演
- 3) 日本マンパワー編 キャリアアカウンセラー養成講座レジュメ
- 4) 三川俊樹著 (2008)、大学におけるキャリア教育の意義と課題、関西学生就職指導研究会平成20年度第1回研修会レジュメ
- 5) 井戸和男 (2008)、大学における職業人教育のあり方、第45回日本私立大学連盟関西地区就職業務研修会レジュメ